

数字で見ると一目瞭然。**猫統計**  
意外と知らない

vol.①

猫が来院するとき

疾患統計データ協力: アニコム ホールディングス  
小動物臨床における疾患統計の詳細については  
→ アニコム 家庭どうぶつ白書  
<http://www.anicom-page.com/hakusho/> を参照ください。

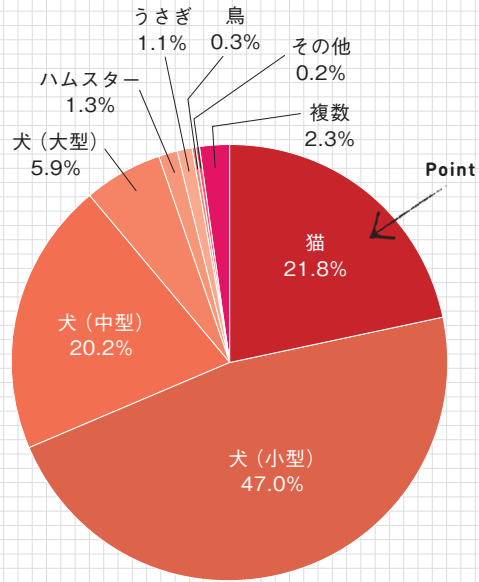


図1 どうぶつ種別来院割合

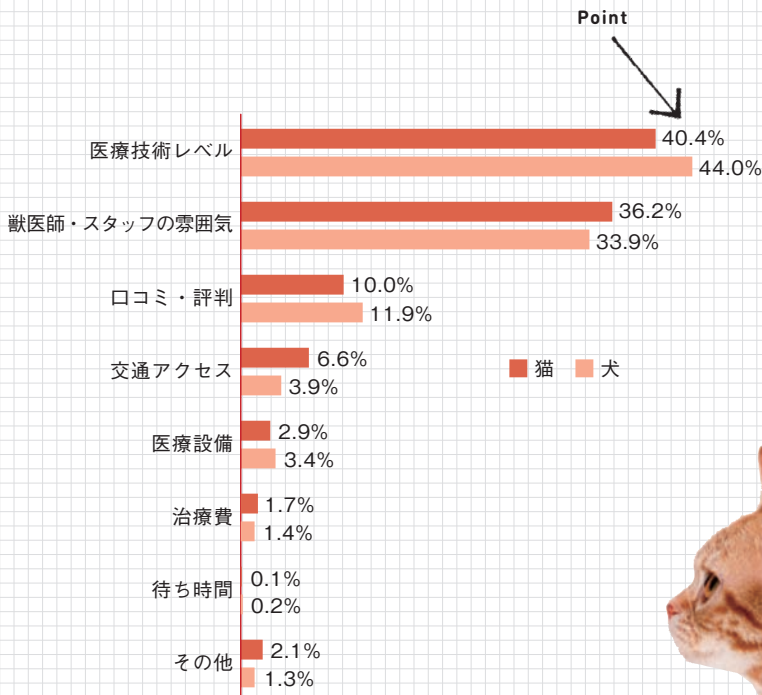


図2 猫と犬の飼い主の病院選択基準

21.8%

動物病院に来院する動物に  
猫が占める割合

動物病院を訪れる動物のなかでは、  
犬の飼い主が7割、  
猫の飼い主が2割を超えていた (図1)。



40.4%

猫の飼い主が病院を選択するとき  
「医療技術」を重視している割合

猫の飼い主の病院選択基準の第1位は「医療技術レベル」で40.4%であった (図2)。犬と猫の飼い主を比較してみると、猫の飼い主は上記の理由以外に、「スタッフの雰囲気」や「交通アクセス」の良さを重視していることがうかがえた。一方で「口コミ・評判」は犬の飼い主よりも若干低く、飼い主同士のコミュニケーションは犬に比べやや少ないものと思われた。

\* 図1、図2：2008年、第2回飼い主様満足度調査キャンペーン、anicom pafe 主催、n=9,898頭 (うち猫数2,141頭) の結果を集計

# 数字でみると一目瞭然。猫統計

意外と知らない

vol.②

## 猫と予防医療

疾患統計データ協力: アニコム ホールディングス  
 小動物臨床における疾患統計の詳細については  
 → アニコム 家庭どうぶつ白書  
<http://www.anicom-page.com/hakusho/> を参照ください。

猫の来院理由を調査したところ、

予防目的での来院は15.1%で、

犬の19.5%と比較すると若干低めとなっており、

飼い主への啓発によるさらなる来院促進が

可能であると考えられた(図1-1、1-2)。

また、来院理由別満足度(表1)から、以下のような特徴がみられた。

- ・ 予防で来院した際には動物への心配り、診療時間に対する満足度が低い。
- ・ 定期治療での来院の際には相談のしやすさには満足しているが、待ち時間に対する満足度は低い。
- ・ 病気やケガで来院した際は、動物への心配りや説明のわかりやすさには満足度が高い。

以上の結果から、猫の飼い主に対しては、予防や相談の際には、もう少しじっくりと時間をかけてコミュニケーションをとることが、より一層の満足度向上につながると予想される。

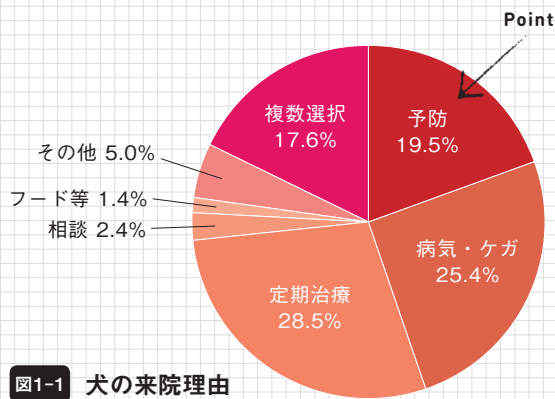


図1-1 犬の来院理由

# 15.1%

## 「予防」を理由に来院する猫の割合

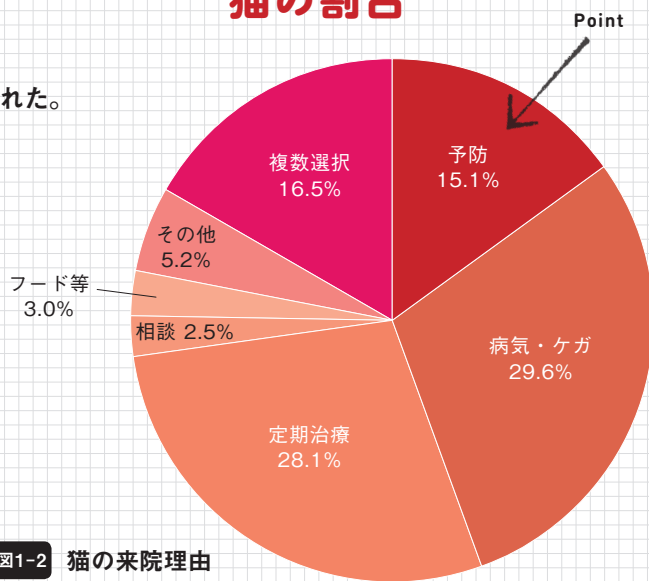


図1-2 猫の来院理由

表1 猫の飼い主の来院理由別満足度

満足度項目	来院理由						
	100点満点	予防	病気・ケガ	定期治療	相談	フード等	その他
受付スタッフの応対	85.2	85.8	84.8	84.9	81.6	84.1	87.4
動物への心配り	85.8	85.8	88.4	88.2	86.8	85.9	87.0
相談のしやすさ	86.4	86.4	88.0	88.2	87.7	85.5	88.0
説明のわかりやすさ	85.9	85.9	88.0	87.7	84.4	85.9	87.7
診察・治療の信頼感	84.8	84.8	86.6	86.3	85.6	83.7	87.3
待ち時間	63.6	63.6	61.2	58.5	62.0	69.8	64.0
診察・治療時間	76.8	76.8	78.7	78.9	78.4	80.2	79.5
費用の納得感	68.2	68.2	68.3	68.0	67.0	70.8	70.2
交通の便利さ	70.5	70.5	69.1	69.4	66.3	74.2	69.3
駐車場	61.3	61.3	63.5	61.6	62.8	54.6	62.6
建物の快適性	75.7	75.7	76.9	76.5	77.8	73.4	76.8
受付や待合室	78.3	78.3	78.1	77.5	80.2	78.2	79.2
待合室や洗面所	74.7	74.7	75.2	76.2	80.4	73.4	75.9
診察室の雰囲気	77.8	77.8	79.1	78.7	83.3	76.2	77.8
情報の充実度	70.5	70.5	69.5	69.2	70.3	71.4	68.9
掲示物や案内表示	70.6	70.6	69.7	70.4	71.6	72.6	70.0

\*満足度: 各項目に対する満足度を100点満点とした場合の猫の飼い主の平均

\*図1-1、図1-2、表1: 2008年 第2回 飼い主様満足度調査キャンペーン anicom pafe 主催 n=9,898頭(うち猫数2,141頭)の結果を集計

数字でみると一目瞭然。**猫統計**  
意外と知らない

vol.③  
**猫の通院、入院**

疾患統計データ協力: アニコム ホールディングス  
小動物臨床における疾患統計の詳細については  
→ アニコム 家庭どうぶつ白書  
<http://www.anicom-page.com/hakusho/> を参照ください。

**4.2日**

**「循環器」「内分泌」疾患の  
年間通院日数**

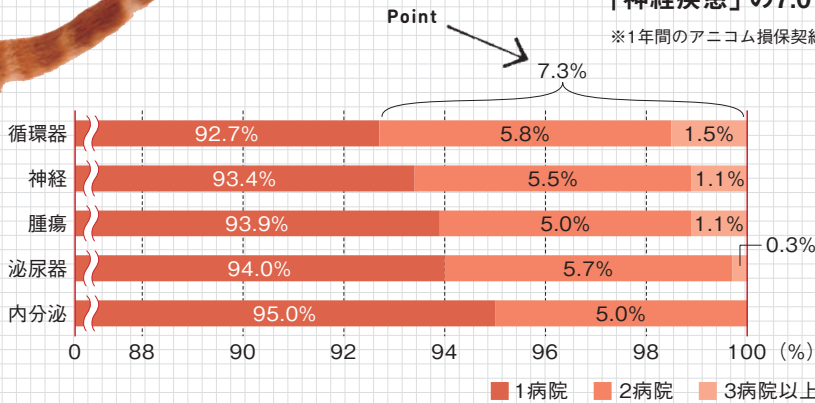


図3 各疾患ごとの通院病院数 (複数病院への通院が多い上位5疾患)

複数の病院に通院している人の割合がもっとも高かったのは、「循環器疾患」の7.3% (循環器疾患で請求があった人のうち、複数の病院を受診した人の割合。図3「2病院」「3病院以上」の合計。以下同様)であった。続いて、「神経疾患」の6.6%、「腫瘍疾患」の6.1%、「泌尿器疾患」の6.0%等も高い値を示した (図3)。複数の病院に通院する理由としては、転院のほか、専門性が高い病院に2次診療やセカンドオピニオンを求めて受診するケース、緊急性が高く、かかりつけ病院の休診日や夜間に他院を受診するケース等が考えられる。

\* 図1~3: 2008年2月1日~2009年3月31日までの間にアニコム損保の「どうぶつ健保」の契約を開始した0~10歳の猫20,675頭を対象に集計

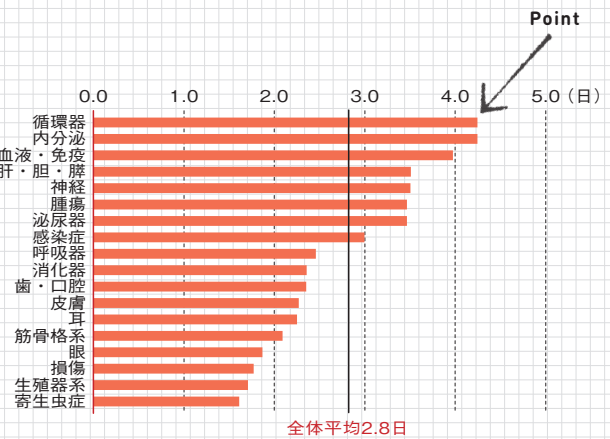


図1 疾患別年間平均通院日数

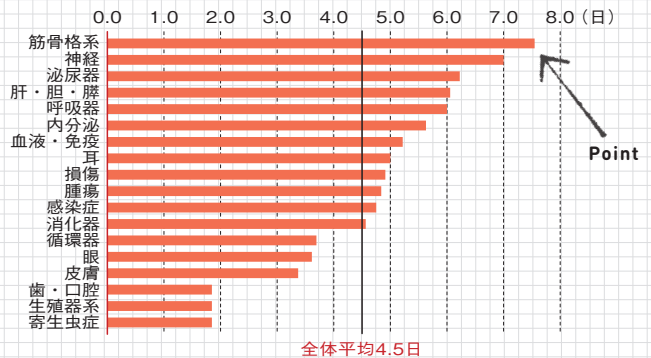


図2 疾患別年間平均入院日数

年間の平均通院日数 (通院保険金請求件数に基づく) がもっとも多かった疾患は、「循環器疾患」、「内分泌疾患」の4.2日であり (図1)、全疾患の平均通院日数は2.8日であった。また、入院日数が長い疾患は「筋骨格系疾患」の7.6日、「神経疾患」の7.0日、平均入院日数は4.5日であった (図2)。  
※1年間のアニコム損保契約期間中に通院・入院それぞれ20日間の限度日数あり。

**7.3%**  
循環器疾患の患者が  
複数病院へ通院する割合

猫の腫瘍  
Feature Article Part 1

猫の骨盤骨折  
Feature Article Part 2

猫の臨床  
Feature Practice

海外論文  
From JFMS

インタビュー  
Interview

猫統計  
Statistics



# 数字でみると一目瞭然。意外と知らない猫統計

## vol.4 子猫と高齢猫

疾患統計データ協力: アニコム ホールディングス  
小動物臨床における疾患統計の詳細については  
→ アニコム 家庭どうぶつ白書  
<http://www.anicom-page.com/hakusho/> を参照ください。

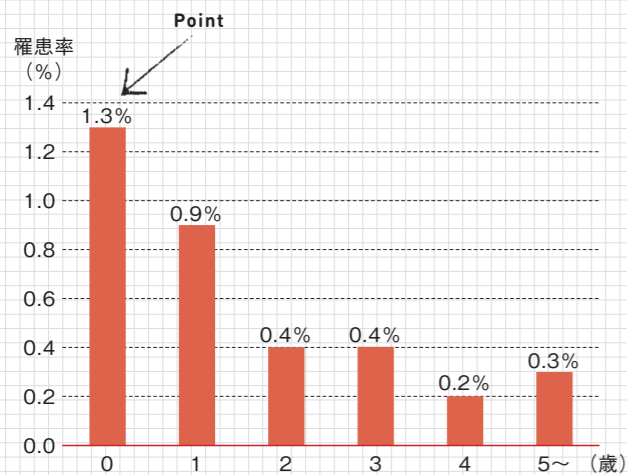


図1 猫の異物誤飲発生率の年齢推移



### 腎臓病が多くなり始める年齢

猫の泌尿器疾患のうち、腎臓病の罹患率が急激に上昇する年齢は6歳以降であることがわかった(図2)。慢性腎臓病は症状が現れる前に血液検査や尿検査を実施し、腎臓用療法食や投薬を始めることで、進行を遅らせることができると言われている。とくにシニア期で疾患の発症が増加することを考慮し、個体の年齢に応じて定期的な健康診断を勧める必要があると考えられる。

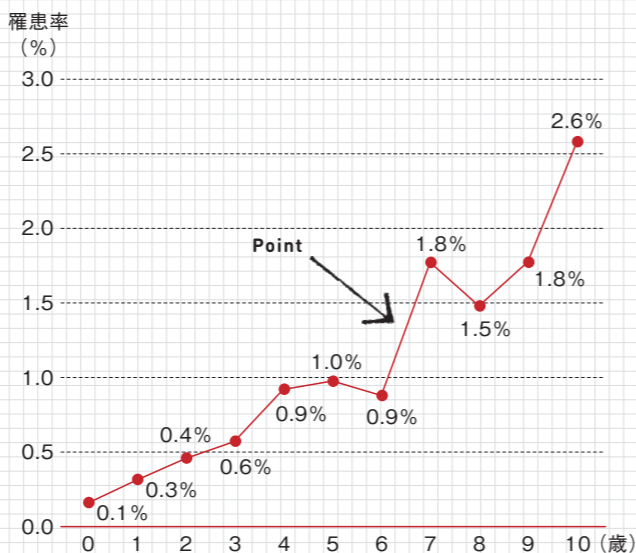
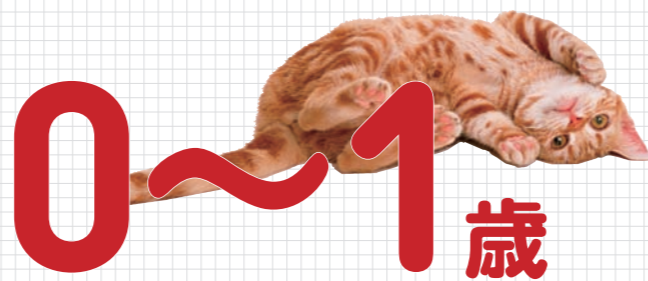


図2 腎臓病の罹患率の年齢推移

表1 猫の異物誤飲の再発率と手術実施率

年齢	再発率	手術実施率
0歳	6.7%	24.4%
1~10歳	1.4%	26.4%



### 異物誤飲にとくに気をつけたい年齢

猫の異物誤飲の発生率を年齢別にみると、0~1歳の発生率が2歳以降と比較して高いことがわかった(図1)。0歳では2歳と比べ、3.3倍もの発生率となっており、新しく子猫を飼い始めた飼い主へはとくに注意を促す必要があると考えられる。また、0歳猫の異物誤飲の再発率は成猫と比べてきわめて高いことがわかった(表1)。一方で、各年齢における手術実施率には大きな差異がなく、異物誤飲によっておよそ4頭に1頭が手術を受けていた。

さらに、猫の手術実施率(表1)は犬の20.8%(0~10歳の平均: アニコム家庭どうぶつ白書2010より)と比べて若干高めとなっていた。その理由としては、体が小さい、ひも状異物が多い、発見が遅れがちとなる、内視鏡での処置が難しい、閉塞が確認されたときには開腹処置しかとれないこと等が考えられる。

家族の見守り、配慮によって異物誤飲を防ぐよう、飼い主への十分な注意喚起が重要だと考えられる。

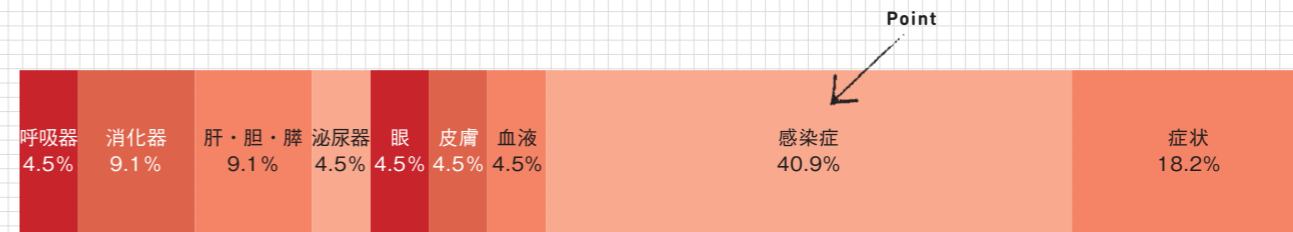


図3-1 猫の死亡原因 (0歳)

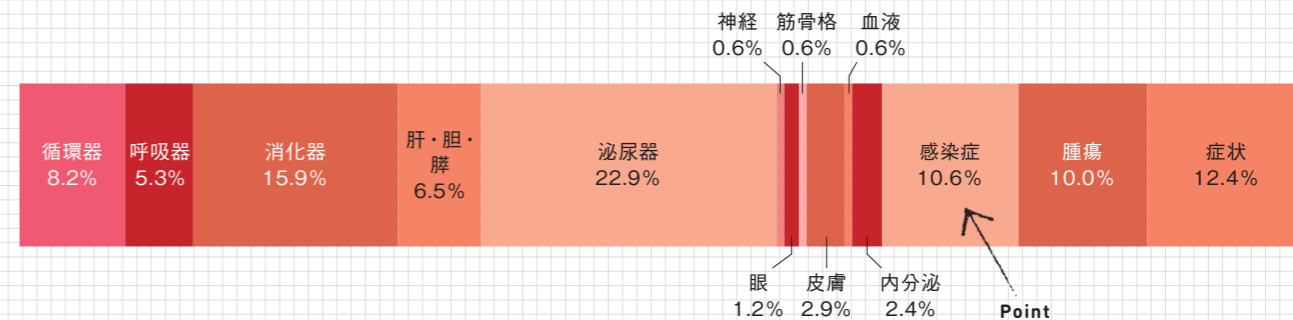


図3-2 猫の死亡原因 (0~10歳合計)

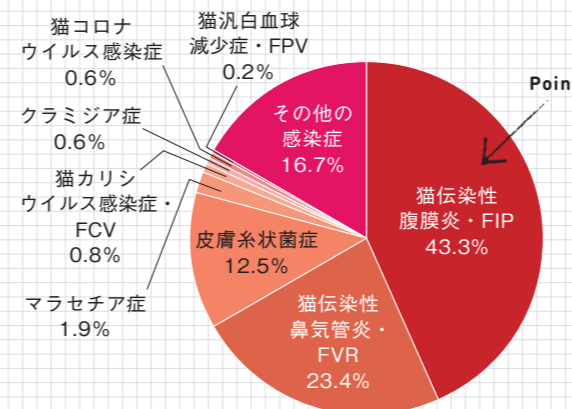


図4 0歳の猫の感染症内訳

# 40.9%

0歳の猫が感染症により死亡する割合

0歳の猫の死亡原因では感染症がもっとも多い結果となった(図3-1)。

感染症の内訳としては、「猫伝染性腹膜炎・FIP」がもっとも多く43.3%、続いて「猫伝染性鼻気管炎・FVR」23.4%となっていた(図4)。

ちなみに0~10歳までの猫全体の死亡原因の第1位は「泌尿器疾患」、第2位は「消化器疾患」であり、「感染症」は第3位で10.6%であった(図3-2)。

※死亡解剖直前1か月に動物病院を受診し、保険金請求をした契約において保険請求のあった疾患を調査し、その疾患の割合を0歳と、0~10歳の猫全体で示した。  
※対象: 死亡解剖直前1か月に保険金請求をした0~10歳の猫190頭(うち0歳の猫は24頭)。  
※疾患区分: 循環器、呼吸器、消化器、肝・胆・膵、泌尿器、生殖器、神経、眼、耳、歯・口腔、筋骨格、皮膚、血液・免疫、内分泌、感染症、寄生虫症、損傷、腫瘍、症状。



\*図1~4、表1: 2008年2月1日~2009年3月31日までの間にアニコム保の「どうぶつ健保」の契約を開始した0~10歳の猫20,675頭を対象に集計